

ラオスに行けばきっとこの国を、 ラオスの人たちを好きになって帰ってくる

ラオス・スタディーツアー

熊本大学文学部地域科学科4年 大貴 由加



▲熊本ラオス友好協会が支援する学生達との交流会
(筆者：前列中央)

『ラオスに行けばきっとこの国を、ラオスの人たちを好きになって帰ってくる』そう事前学習会で話を聞いて、私はよく知らない国、ラオスに行ってきた。そして日本に帰ってきた今、私はラオスを人に勧めたい気持ちになっている……。ということは私はラオスを好きになったということだろうか。

日程の1日目2日目はこれぞ<スタディー・ツアー>といった感じで、元首相宅、日本大使館訪問、JICA施設見学、病院視察など内容盛り沢山であった。普段怠惰な生活をおくっている私は久しぶりに味わう分刻みの移動とその情報量の多さにへとへとになった。このハードなスケジュールの中ではラオスで働く日本人の話を書く機会が多かった。どのような関わり方であれ、私が共通しているな、と感じたことを強引にまとめると、ラオスで働く日本人は「自分たちはラオスに発展してもらうために活動しているが、今のラオスのままでも十分魅力的だと思う。だから、これもこっちのエゴだとは思いますが、日本のように近代化してほしくないような、このままでいてほしいような気持ちになってしまうこともある。ラオスの人も発展したいのか発展したくないのか、その行動や態度を見ているとやる気があるのかなのかかわからない時がある。とにかくのんびりやっているといくしかない」、という感じで、ラオスの人たちの価値観に振り回される時もあるが、ラオスの人たちがとても好きだ、というのが伝わってきた。

一週間の滞在の中で一番心に残った出来事は中

国からラオスへ南下してきた民族、ルー族の村を訪問したことだ。それは訪問といっても、言葉も通じないし、特定の誰かに会いに行くわけでもなかったのだから<見学>に近かったかもしれない。ルー族の人たちやその家の中は勝手に写真をとっていいらしいよ、という冷静に聞けば相当に奇妙な情報が与えられていたし、人が人を見に行くという体験、まるで「ウルルン滞在記」の世界である。村に入ると最初は人がまばらで静かだなあ、と思っていたら、後からあとから村の人たちが集まってくる、気づいたらたくさんの人たちに囲まれていた。村の人たちは竹で編んだ家に住み、観光客が来ると織物を売っているそうだ。この村で印象深かったのはルー族の子どもたちで、彼らは私たちが持ってきたビデオカメラに興味津々で、目をキラキラさせてビデオの周りに寄ってきた。その様子がとてもかわいかったので私は思わず写真を撮ってしまった。30分足らずの短い訪問だったが、私たちがルー族の村を<見学>しに行ったにもかかわらず村に入ると私はたくさんの視線を感じた。自分が大勢の人に見られている、村の人たちが逆に私たちを<見学>しているように思われて、すごく不思議な気持ちになった。

今回の旅行は<スタディー>・ツアーだからこそできる体験がたくさんでき、私にとってとても貴重な経験になった。もちろん<スタディー>を抜きにしても、買い物や観光だけでも楽しくて、むしろそっちの時間が足りない、とも思ったりしたが。ラオスにはもう一度、今度は今回見逃したメコン川の夕日を見に行きたいと思う。



▲ルー族の村の子供達